

# The Cambridge Gazette: Lessons Learned

## For Young Samurais in the Age of Globalization and the Internet

『ケンブリッジ・ガゼット: Lessons Learned』  
第7号 (2006年12月)

ハーバード大学  
ケネディ・スクール  
シニア・フェロー 栗原 潤

グローバル時代における知的武者修行を目指す若人に贈る栗原航海(後悔)日誌@Harvard

### 今月号の目次

1. 今年最後のハーバード便り
2. 栗原後悔日誌@Harvard
3. 外国語、内容、そして行動  
誰が外国語を必要とする「ヒト」か?  
「英語バカ」が意味するもの  
行動のための言葉と内容
4. 編集後記

#### 1. 今年最後のハーバード便り

米国では感謝祭の頃からクリスマスのイルミネーションが美しい街並みを一層輝かせます。その輝きは同時に年の終りが近づいたことを私達に告げ、時の経過の速さを悟らせてくれます。こうした初冬のケンブリッジから、「グローバル時代における知的武者修行」を志す皆様に、今年最後のご報告を致します。

#### 2. 栗原後悔日誌@Harvard

マサチューセッツ工科大学(MIT)のスザンヌ・バーガー教授のご著書『MIT チームの調査研究によるグローバル企業の成功戦略 (How We Compete: What Companies around the World Are Doing to Make It in Today's Global Economy)』が丁度1年前に出版されましたが、3ヶ月前の9月に邦訳されたのを機会に訪日されると聞き、同教授にお目にかかりました。その時、私はウェブで見つけた宮内庁三の丸尚蔵館の展覧会の解説を印刷してお持ちしました。そして特別展「明治の彫金—海野勝珉とその周辺」をご説明しようとしたのですが、彫金等多くの言葉をどう訳すのか分からず困り果て、私の語彙の少なさと翻訳の難し

さを改めて感じた次第です。時間は過ぎますが、夏の終りにバーガー教授から「ジュン、今度東京に行く時、博物館を訪れるなら東京国立博物館と尚蔵館、どちらが良いと思う?」と聞かれた時、伊藤若冲の『動植綵絵』の魅力に負けて、「私なら尚蔵館に行きます」と答えた手前、いい加減なご説明を同教授にしてはいけないと思っていたながら、結局は不十分な解説に終わってしまいました。

今年6月、一時帰国からケンブリッジに戻った時、本学の友人と日本で公演していた歌舞伎『国性爺合戦』の話をしました。その時も、主人公、和藤内(わとうない)の意味を説明する時に大変苦労しました。この歌舞伎(及び浄瑠璃)の主人公は父親が中国人で母が日本人という国姓爺(鄭成功)という実在の人物がモデルになっております。原作者の近松門左衛門が「和(日本)」でも「唐(中国)」でも「ない」という小粋な洒落から和藤内と名付けた訳です。この洒落の面白さを英語で説明しつつ、洒落を翻訳することの難しさと退屈さを改めて感じた次第です。こうした趣味の分野だけでなく、専門分野においても私の外国語との格闘は毎日続いております。現在、私は東アジアにおける政治経済問題について研究し、またその地域におけるアドバイザーとしてビジネスを行っております。そのため大量の報告書や文献を読み、また多くの方々の意見を聞く必要に迫られています。このため、英語をはじめ中独仏韓露といった外国語がたとえ部分的であっても必要になってきております。小誌前号でもお伝えしましたような広大で躍動的な変化を遂げる中国を知るには、相当な覚悟で、外国語に関しても「知的したたかさ」を身に付ける必要があります。

既に読まれた方も多いたと思いますが、今年のダボス会議の前に発表された『ハーバード・ビジネス・レビュー(HBR)』誌2月号に特集「2006年版画期的な考え (Breakthrough Ideas for 2006)」が掲載されていました。その冒頭に挙げられていたのが「統合能力の高いリーダー(The Synthesizing Leader)」です。著者である本学教育大学院のハワード・ガードナー教授は、最初にノーベル物理学賞受賞者のマレー・ゲルマン博士から伺った話を語ります。ゲルマン博士は、21世紀における最も価値有る個人的特質は情報を統合化する能力であると仰ったそうです。すなわち、如何なる情報を注視し、如何なる情報を切り捨て、重要と判断した情報を如何に知識として取り込み、重要な相手と情報交換するかが重要な個人の能力であり、リーダーはそれに長けている必要があるとガードナー教授は語ります。私もこの「情報を統合する能力」こそ、今後一層複雑化する世界において生き抜く「ワザ」となってくると思います。

時折、目と耳を疑うような情報が巷間飛び交っているのは皆様もお感じになっているでしょう。確かに、真偽を確かめもせず、目新しい情報に安易に飛びついて勝ち誇ったかのように告げる報道や資料は少なくありません。これに関して、私の或る本との出会いをご紹介します。20年程前、サラッとした立ち読みだけで通り過ぎようとした本の或る一節に目を奪われました—『情報化社会』が次第に定着する中では当然起こる現象として、大量の、意味のない『情報』の氾濫という現象がある。『ジャンク』(ごみ屑)と呼ばれる意味のない『情報』が氾濫する中で、その真偽と同時に内容について鋭い選別眼がすべての人に求められるのが『情報化社会』の特徴なのである。…この選別眼を持つ人々だけが、経済界での成功者の資格を持つ。…大量に氾濫する『情報』の真偽を判別するには、何よりも事実を知らなければならない。それも現在の『事実』に限らず、歴史的な『事実』についても正確な知識を持つ必要があり、それにはきわめて

大量の『勉強』が必要である。大量の『事実』を知ろうとすれば、多くの文献と資料を『速読』する能力を身につけなければならない。それも日本語だけでなく、英語をはじめ外国語の文献と資料にも適用するとすれば、こうした能力を身につけるための持続的な努力が必要であり、これはすべての人に求められる資質ではあり得ない。…こうした資質を備えている人材は、勿論少数者に限定され、その少数者だけに『情報化社会』で成功する資格がある。この意味での厳しい『選別』が、『情報化社会』が進む中で進行することは避け難い『メカニズム』であり、そこから落ちこぼれた人々が『陰謀説』に救いを求めようとするのも、これまた避けられない流れなのである」と。この著者の主張は正しくゲルマン博士の仰っていることと同じです。この本は日本の評論家である長谷川慶太郎氏による『強い「個性」の経済学』です。有能で高い「志」を抱く皆様、継続的な努力を厭わず、正確・客観的・合目的な情報収集を通じた知識の蓄積を行い、ステレオタイプ、陰謀説、そして根拠の無い希望的観測に流れる誘惑に立ち向かう勇気を持って頂くことを期待します。

### 3. 外国語、内容、そして行動

今回のテーマは「外国語、内容、そして行動」です。いつもの通り、結論を先取りして簡単に申し上げます。グローバルな舞台で知的武者修行を志す人々は、好むと好まざるとにかかわらず、また多かれ少なかれ外国語を修得する必要に迫られている。こうして我々は外国語学習を、①誰が、②何のために、また何を、③如何なる流暢さの外国語で話す必要があるのかという視点から再検討してみなければならない。従って、日本国民の①全員が、②無目的に、また③無闇やたらに流暢な外国語を話す必要がないことは明白である。翻って国際的な知的対話が不可欠な分野のプロフェッショナルが、専門分野で必要とされる国際共通語で質の高い直接的・継続的・多

角的で双方向の情報交換ができないとなると、そのプロフェッショナルは世界では通用しないのがグローバル時代の厳しい掟である。しかし、外国語が大切であるとしても、小誌で常に強調する一流の専門知識、教養等、「内容と行動」が伴わなければ、言葉が役割を果たさない道具と化する。以上が今月の話題です。

### 誰が外国語を必要とする「ヒト」か？

まず外国語は、「誰」が「何の目的」から必要なかを考えてみましょう。自称「変人」の私は人々を次のように評価します。①良き家族の一員かどうか、②良き隣人かどうか、③能力の有るプロフェッショナルかどうか、④教養と礼節をわきまえた一市民かどうか、以上4つの評価基準です。私が、①家族を大切に人にする人かどうか、また②道ですれ違った時に感じ良い挨拶ができる隣人かどうかと考える時、外国語は何の基準にもなりません。家族団欒の会話やご近所付き合いを外国語でする人はいないでしょう。④知性・品性を具えた一市民かどうかに関しても、健全なる「良識」を具えているかどうかで、外国語の知識は別段必要の無い資質です。

次に③プロフェッショナルの場合を考えてみます。当然のこととして(a)能や歌舞伎等の伝統芸能の方々、それに(b)スポーツ選手やファッション・モデル、ピアニスト、板前さんといった言語を使わない「ワザ」で勝負をされている方々も外国語が必須ではありません。勿論、サッカーのオシム監督の指示を的確に選手に伝えたりするとなりますと、当然、正確に翻訳する方々が必要となります。そして(c)国際的な交流が活発な分野におきましても、記号や数式という特殊言語を使用する物理学者、数学者、天文学者といった方々も流暢な外国語が必須という訳ではありません。

では人文科学・社会科学といった人間や社会を扱う学問はどうでしょう。これに関しても、日本文学やギリシャ文学を志している「ヒ

ト」が他の言語を必須とする訳ではありません。以前、本学ファカルティ・クラブで食事をしていて、背後から日本語が聞こえてきました。日本からのお客様を本学の日本研究者がおもてなしをしている様子でした。盗み聞きする訳ではなかったのですが、テーブルが近かったため聞こえて来た話から推測すると明治以前の演劇の話のようでした。しかしこの場合、日本のお客様は別段米語が必須である訳ではありません。逆に本学研究者が日本語を必須として心得ていなくてはならないのです。また昨年2月に中国を訪れた際、長春のエレクトロニクス・メーカーの方とお話をしました。その方は会社の製品とその納入先やライバル企業との技術水準の差はご存知ですが、中国経済全体や世界経済のことはほとんどご存知ありませんでした。しかしこの方も、私の話す「日本訛りの英語」を聞き取る必要はありません。この方はグローバルな競争分野ではあるが「中国の一産業における事情通」として素晴らしい情報をお持ちで、私自身感心しながらその方のお話を聞いていました。こうして私こそが経済学と産業の知識、そして英語で報告書を作成する作業能力が問われた訳です。少々理屈っぽくなりましたが、こう考えますと本当に外国語の学習を必要としているのは、「グローバルな形で競争する分野で、グローバルに双方向で直接的な知的対話をすべき人々」だけです。

勿論、外国語が必須でない方々も外国語が話せるに越したことはありません。では、「如何なる流暢さ」の外国語を話せば良いのでしょうか。私は言葉の流暢さを評価する際、①挨拶程度(Thank you!等が話せる)、②旅行程度(ホテルに泊まり、食事が出来る)、③気楽な日常生活や簡単なビジネス会話程度(一対一で何とか意思の疎通が出来る)、④大勢の中でディスカッションが出来る程度、⑤演説が可能となる程度、以上5段階をおおよその目安として考えています。こう考えますと、「グローバルな競争分野においてグローバルに双方向で直接的な知的対話をすべき人々」以外

の人、すなわち「普通の人々」は、①であれば外国人と楽しく挨拶ができ、②であれば海外旅行が楽しくなり、③であれば簡単なビジネス出張や海外生活ができる訳です。

従ってここでの問題は、③と、④及び⑤との間の大きな隔たりです。この問題は母国語である日本語でも同じです。「誰もが言葉を話せるものだから、言葉について発言する資格があると思っている (Ein Jeder, weil er spricht, glaubt auch über die Sprache sprechen zu können.)」とゲーテが語った通り、日本語を日常的に使う私達は、「日本語は大丈夫」と無意識のうちに思っています。が、実は母国語であったとしても、④と⑤は非常に難しいレベルであり、専門的知識を必要とする議論に参加し、また人々を感動させる演説をするとなれば、どの言語でも大変なことです。こう考えると、「グローバルな競争分野においてグローバルに双方向で直接的な知的対話をすべき人々」が、ハーバード大学での研究会等、大勢の中でのディスカッションができる(④)かどうか、また外国の専門家の前で演説が可能(⑤)かどうか、これこそが日本が取り組むべき外国語学習の問題だと私は考えます。少し厳しい言い方をすれば、「グローバルな競争分野においてグローバルに双方向で直接的な知的対話をすべき日本人」が、国際的な会議で一言も発言せず、或いは原稿を棒読みして相手を退屈させるような演説を、しかも聞き辛い米語ですることこそが日本の問題だと考えています。では日本には、どれ程の数の「グローバルな競争分野においてグローバルに双方向で直接的な知的対話をすべき日本人」が必要なのでしょう。残念ながら私には分かりません。勿論、多ければ多いほど良いことには違いありません。ただ国民全員でないことは確かです。同時に、長谷川慶太郎氏が仰った通り、外国語を含む大量の情報を速読し、大量の勉強をして選別眼を養い、ジャンク情報を捨象する能力を持つのは少数者に限られることでしょう。こうした能力を養うには、相当量の個人の努力が必要となりま

す。この意味で「志」の高い才能溢れる若人の方々に、怯むことなく、④や⑤のレベルの外国語を学んで頂きたいと思っています。

### 「英語バカ」が意味するもの

私は直接的・間接的に「英語バカ」と言われた経験があります。言われてみて思い当たるふしが無くはないのですが、ここで「英語バカ」とは何かについて改めて整理してみたいと思います。すなわち、①知的な英語が話せる、②英語は話せないが知的な話ができる、③知的ではないが英語が話せる、④知的でもなく英語も話せない、という4分類に基づき考えてみたいと思います。話を進める前に、フランス政府の日本に関する或る資料をご紹介します。2003年11月に発表された「日本におけるビジネス関係の正しい実践方法(De la bonne pratique des relations d'affaires au Japon)」を私は苦笑しつつ読み、複雑な気持ちになりました。その資料は、冒頭で日本では日本語が最大の障壁の一つであることを記しています。そして英語で交渉を行う場合、以下の4つの留意点を挙げています。

- (1) 日本での英語の用法は往々にして(我々と)異なり、また不正確で、そのため誤解を招くことが簡単に起こってしまう(Le pratique de l'anglais au Japon est souvent différent et imprécise, et peut facilement mener à des malentendus.)。
- (2) 日本人は公の場では絶対に(英語の)単語や文章が分からないということを認めない(Un Japonais n'admettra jamais publiquement qu'il n'a pas compris le sens d'un mot ou d'une phrase.)。
- (3) 英語が話せる日本人が必ずしも良き交渉相手とは限らない(一般に彼等は一番若く、従って意思決定者ではない)(Ceux qui parlent anglais ne sont pas nécessairement les meilleurs interlocuteurs (en général les plus jeunes, et donc pas les preneurs de décision).)。
- (4) 交渉担当者のただ一人だけが英語を話す

なら、その人だけがあなたの発言を訳すことになる。しかもその時あなたはその人があなたのメッセージを正確に翻訳して伝えたかどうかを確かめる方法を持たない(Si un seul de vos interlocuteurs parle anglais, il sera seul à traduire ce que vous direz, et vous n'aurez donc aucun moyen de vérifier qu'il a correctement fait passer le message.)。

私は3年前にこれを最初に読んだ時、フランス人からこんなにも皮肉に満ちた、しかしながら的確な形で日本人との英語による交渉時の問題点を、政府資料として、しかも最近になって作成されたかと思うと複雑な心境になりました。私流に解釈すれば、日本人は、(1)英語を(彼等の基準では)正確に学んでいない、(2)英語の単語や文章が分からなくてもその場で聞かず、分からないままで黙っている、(3)英語を話せる日本人はいるが若過ぎて交渉に役に立たない、(4)翻訳には元来誤訳が不可避であるが、一人の通訳では日本人との交渉は不正確極まりない、以上4つの留意点を仏国政府から賜った訳であります。フランス語を理解できる方はご自身でインターネットで検索し、日本において通訳を介した交渉が如何に大変であるかを更に詳述しているこの資料を確認して頂きたいと思います。

第三国である仏国政府のこの見解を念頭に、先の「英語バカ」の問題を考えてみたいと思います。内容の濃い話を流暢な英語で話せること(①)は問題有りませんし、英語も話せず中身も無い人間(④)が問題外であることは言うまでもありません。②のタイプの方は確かにいらっしゃいます。日本が生んだ偉大な数学者である小平邦彦先生は、本学をはじめプリンストン高等研究所(IAS)等、海外で研究をされた方です。正確な話ではないので恐縮ですが、尊敬する或る数学者の方から伺った話では小平先生の英語はそう流暢ではなかったそうです。が、米国をはじめとする世界の研究者は小平先生の訥訥と語るお言葉を一言も聞き漏らさないようにと、敬愛の眼差し

で真剣に聞き入っていたそうです。またロンドン海軍軍縮会議に臨んだ若槻禮次郎首席全権は、濱口雄幸首相からの指示を自伝『古風庵回顧録』の中に書かれています。「私自身は、外国語を話すことは出来ず、外交の辞礼に倣わず、殊に海軍の専門知識がない。とうてい使命を果たす自信がないので、固くお断りした。それに対して、… 外国語が出来ないでも、英語に堪能な者を随員につけるから、一向差支えない。外交の辞礼なるものは別段練習を要するものでもなく、常識をもって適宜応酬すればいい。海軍の専門知識などは、随員がついており、殊に海軍大臣が全権の一人として出席するから、専門の知識は十分だ。ぜひ承諾せよといって、たつて懇請された。そこで、私は、これは国家に対する大変な御奉公であって、一身を賭さなければならぬ」と。そして後に駐米大使となる齋藤博という名外交官が側で完璧な英語の通訳として補佐するなか、若槻首席全権は決裂の危機にあった交渉を見事に合意に到らしめました。

英語は流暢ではないが内容のある話が出る(②)方々は、一様に必ず本質を正確に把握されており曖昧な部分を決して残さないこと—先の仏国政府の指摘で(2)の問題が無い—が特徴です。或るプロフェッショナルの通訳の方から教えて頂きましたが、国連(UN)では母国語が公用言語である国の代表の方々は、多くの場合母国語で話します。が、その時でも自分の言葉が正確に(特に英語に)翻訳されているかをヘッドホーンで聞いて確認しつつ話され、必要と有らば通訳に修正を求めると聞きました。このように②の方々は国際的対話の際、小平先生のように数式という非言語情報交換能力とお人柄の良さ、若槻首相のように優れた人格と卓越した通訳の方の存在という比類の無い「代替的条件」をお持ちです。

しかし、極めて優秀な通訳を常に側における身分にない私達「普通の人」、すなわち政治経済分野における一介の研究者や一般のビジネスマンはどうでしょう。専門分野における

最先端の情報を理解するとなれば、大抵の場合外国語、特に事実上の国際共通語(*the lingua franca*)である英語での理解力が無ければ、私には不可能としか思えません。毎月次々と発表されてくる全米経済研究所(NBER)の論文、国際通貨基金(IMF)や経済開発協力機構(OECD)の報告書、そして同僚である本学研究者が書いた原稿は、ほとんど翻訳されていないものばかりです。逆に言えば、翻訳されているものは稀有と言っても過言ではありません。また『エコノミスト』誌や『ウォールストリート・ジャーナル』紙といった政治経済を考える上で重要な海外の雑誌・新聞も翻訳されてはいません(僅か一部分が日本のマスコミに転載されますが)。こう考えますと、余程特殊で極めて狭い分野でないかぎり、外国語を理解する能力と専門知識とは密接な関係があることを理解頂けると思います。こうして、英語は流暢ではないが内容の濃い話ができること自体を私は完全には否定しませんが、極めて限られた場合であると考えております。

次に③の英語は話せるが内容が無いという所謂「英語バカ」を考えてみます。私はこの言葉の意味を未だ正確に理解できていません。前述した私流の言葉の流暢さを考える時のレベルを基に推論すれば、②の旅行程度(ホテルに泊まり、食事が出来る)、③の気楽な日常生活や簡単なビジネス会話程度(一対一で何とか意思の疎通が出来る)といった外国語のレベルを自慢している日本人に対して、それよりも流暢さに欠ける人々の妬みからの蔑視発言かも知れません。確かに、所謂「帰国子女」が発音は上手であるが専門知識を要する会話についていけない場合や、日本人同士の会合で、別段英語にしなくても良いと思う部分まで無理やり英語にして話す「変な人々」に遭遇する場合があります。これに関して面白い経験をしたことがあります。米国の或る友人が、或る日本人を指して「ジュン、彼の(英語の)発音が余りにもきれいなので如何に話が詰まらないかがすぐ分かる」と言った時、私は思わず吹き出してしまいました。また日

本人同士の討議の時には英単語を交えて自慢気に話されている方々が、外国の方々と真剣勝負の知的対話になった途端に一言も話せないという奇妙な場面にも私は数多く遭遇しました。才能溢れる若い皆様、「英語バカ」という言葉自体変な表現です。はしたない言い方で恐縮ですが、私は何語を話そうが愚か者は愚か者でしかないと考えています。その意味で、②の英語は少し不自由だが話の内容が立派だ、更には①の流暢な英語で皆を納得させる話をする、という評価を得た国際的日本人に成長して下さることを心から期待致します。

### 行動のための言葉と内容

時代を遠く遡り、約 1200 年前の 804(延暦 23)年、遣唐使と共に弘法大師(空海)が乗船した第一遣唐船は難破して現在の福建省霞浦県の海岸に漂着し、彼等には海賊との嫌疑がかけられます。遣唐使をはじめ他の学僧が中国官僚に出した手紙はその嫌疑を解くこと叶わず、50 日程、全員が船の中で過ごすことを余儀無くされます。そうしたなか空海が書いた手紙が優れて達筆・名文であったことから正式に遣唐使節と認められ、漸く長安行きを許されることになりました。皆様、空海の日本での向学心と弛まぬ努力が無ければ、彼等は 50 日どころかそれ以上の日々を空しく福建省の海岸で過ごしたことでしょう。こう考えますと昔も今も外国語は重要であり、また言葉だけでなくその内容、そしてその両者の先には明確な目的意識に裏付けられた行動が無ければ、言葉そのものが生かされることはなく、更には言葉が磨かれることもないでしょう。私もハーバード大学に来て外国語と専門知識とは互いに影響し合う間柄だという認識を一層強めています。日本の或る方が私に向かい、「栗原さん、英語の力が無ければ専門知識を身に付けることができませんか?」と聞かれました。私はこれに対して「そう考えることもできますが、私はむしろ高い水準の専門知識を身に付けようとするれば必然的に英語の能力も高めなくてはという気持ちになると思

います」と答えました。私の経験では国際会議に参加した人は、(単に黙って座っている人を別として)外国語、特に英語の必要性を十分過ぎる程感じていると思います。それ故に次の国際的会合では自らの主張を正確に伝え、相手の主張を正確に理解し、そして互いの情報交換の質と効率を高めるといった目的から国際共通語を真剣に学ぶのだと思います。換言すれば流暢な外国語は前提条件ではなく、積極的な国際的情報交換の結果及び証拠として優れた人々の資質の一つになっていると思います。バーガー教授と共に2004年秋にお目にかかって感銘を受けた日本電産の永守重信社長も、外国語に関してご著書『情熱・熱意・執念の経営』の中で同様のことを仰っています—「わが社の国際化は急ピッチで進展していますが、よく言葉の問題はどう克服しているのかという質問を受けます。そんなときに私は次のように答えています。『外国語は出来るに越したことはありませんが、必要条件にはなりません。…要は、本人にどれだけチャレンジ精神があるかです』と。当然ではありますが、情熱と才能が溢れる永守社長の英語は素晴らしいものがございます。私の場合も日米関係やアジアの問題を正確かつ多角的に検討する必要に迫られ、日本語に加えて英語を学び、同時に中国の台頭とグローバリゼーションの進展により、中国語をはじめ仏独韓露といった言語に堪能な人々との情報交換を行うようになってきました。従って私は言葉そのものより、調査対象を良く知るため、また調査活動をより合理的・効率的にするために様々な言語を学んできた訳であります。

こうした経験に基づき若い皆様方に、外国語に関して2つの助言を申し上げたいと思います。第一の助言は面談時での情報交換の問題です。The Cambridge Gazetteの昨年8月号でも書きましたが、ディヴィッド・エルウッド本校校長が昨年7月に来日した時に日程調整で一番苦労したのが、英語が堪能で専門知識をお持ちの方とのアポイントメントでした。一般的な話として、学界の国際公用語が英語

であるが故に米国研究者には、①無意識のうちにノーマル・スピードで会話することを当然と考えていること、②一流の米国研究者は英語文献をほとんど読了しているため、英語文献に記載されていない非英語情報の面白い点「だけ」を非英語圏の研究者から聞いたがること、以上2つの特徴があります。これに対し、日本を含む非英語圏の研究者には、③英語文献を十分読んでいない場合、英語文献で既に紹介された情報を入念に解説する嫌いがあり、情報交換のための貴重な時間を空費する危険性が存在すること、④非英語圏にいるが故に仕方が無いが、英語によるノーマル・スピードでの情報交換に慣れていないことが多く、時間を効率的に使えない場合があること、以上2つの特徴があります。また⑤言葉の問題ではないのですが、チョットした仕種や顔の表情の変化、所謂非言語コミュニケーション(non-verbal communication)が面談時に大きな役割を果たします。小誌7月号でも触れた人類学者のエドワード・ホールは、著書『沈黙の言葉(The Silent Language)』の中で人間の微妙な動作を見抜く力に長けた名探偵シャーロック・ホームズが活躍する『花嫁の正体(A Case of Identity)』に言及しています。そして非言語コミュニケーションがまったく異なる日本ではホームズ探偵は活躍できなかったらと語っております。以上、米国と非英語圏の合計4つの特徴と非言語コミュニケーションの問題が複雑に絡み合い、米国研究者と非英語圏の研究者が情報交換を行う際に意思疎通がままならず、有益な意見交換ができない事態に私は少なからず遭遇しております。幸いにも昨年の7月は、年金問題及び少子・高齢化問題に関し、本校卒業生である厚生労働省の高倉信行年金課長と榎本芳人大臣官房国際課課長補佐が対応して下さり充実した意見交換ができました。皆様、こうした日米における面談上での特質や非言語コミュニケーションの重要性を認識し、ノーマル・スピードを心がけ、また日本の現状に関する外国語文献にも注意して、国際的な知的対話に慣れることをお勧めします。

第二の助言は翻訳文献に関するもので、私の場合、原則的に「原書主義」を採っています。その理由は、①翻訳者のご苦勞は十分認識しますが、数学のような厳密な形で正否が判断可能な場合は別として、社会科学や芸術論の場合、著者の誤謬と翻訳者の誤訳との判別が不可能で、結局、原書で確認する必要に迫られること、②前述したように専門分野に関しては翻訳文献の数が極端に少なく、また翻訳も時間的に相当のラグが発生するために原書で読まない針の穴から一昔前の天井を覗くような危険が発生すること、以上2つです。冒頭で触れたバーガー教授との会食の際も、同教授の著書の仏訳版(*Made in Monde*)に有る多くの誤訳の問題について話し合いました。また或る時、国際問題研究所(IIE)のアダム・ポーゼン氏が日本の新聞に小論を発表しましたが、結論部分が反対に訳されており、翌朝興奮した彼から電子メールが来たのには思わず吹き出しました。私の返事は「大丈夫だよ。僕は以前から君の意見を聞いていたから誤訳だとすぐ気付いたよ」でした。

不可避ともいえる誤訳の多さに加えて、たとえ正確な翻訳であっても原書が書かれた国・地方の価値観・習慣や専門知識や各国語が持つ独特の意味合いを読者が知らなければ、「誤読」という危険性が発生します。また厳密には誤訳・誤読ではありませんが、各国の言葉が持つ特徴を理解していなければ魅力を理解できない場合も数多くあります。敬愛する福田恒存氏が小論「シェイクスピア劇の演出」の中で、「シェイクスピアの原文は音の強弱が交互に響き、リズム感が生まれて軽やかなテンポのブランク・ヴァース(blank verse)で書かれており、その妙味は翻訳では台詞に移しきれず、原作の美しさの90%は『死んで』しまい、残り10%に、翻訳の『正確さ』と『含蓄』を込める」旨の主張をされており、私自身が納得した記憶があります。また私の惨めな中国語の発音では、李白、陶潜、劉庭芝等の平仄を重視する漢詩の魅力はほとんど削ぎ落とされているに違いないとほぼ諦観に近い

心境にあります。このように外国語を理解することは本当に難しいと言えましょう。話はチョッと飛びますが、訪日した米国人俳優が「翻訳過程を通じて本質的な意味と微妙なニュアンスが失われる」問題に遭遇する姿を描いた映画『ロスト・イン・トランスレーション(*Lost In Translation*)』は非常に面白い映画です。映画の中で主人公が本当に通訳者の言っていること「だけ」を信じて良いのだろうかと思議がるシーンは爆笑ものです。誤解を招かぬよう付言しますが、海外の文化・文明を知らずに情報を受信してもほとんど理解不能であることを承知しているが故に、私は翻訳を不要とは思っていません。私も『聖書』や西洋古典に関して想像を絶する浅い知識しか無かった時代、題名自体が洒落であるエラスムスの『痴愚神礼賛(*Moriae Encomium/The Praise of Folly*)』や、メルヴィルの『白鯨(*Moby Dick*)』を読んだ時、ほとんど理解できなかったという苦い経験があります。もし翻訳者による配慮の行き届いた解説付きの訳本が無ければ再読する勇気が湧き出なかったでしょう。

さて、「日本語は美しい言葉」という表現を聞きます。これに関しても私は未だ納得しておりません。「美しい日本語」というのは理解できますが、「日本語は美しい言葉」というのは外国語に比べて美しいという考えなのでしょうか。私は冒頭に申しましたように「誰」が「何」を「如何に」話すかということが重要と思っています。従って、ゲーテの言葉「言語がそれ自体正しいとか、優れているとか、美しいということはない。言語に具現された精神こそが、正しいのであり、優れているのであり、美しいのである(Nicht die Sprache an und für sich ist richtig, tüchtig, zierlich, sondern der Geist ist es der sich darin verkörpert.)」に私は共鳴します。もし、昔の日本語が美しかったというのであれば、それは昔の日本人の「心」と「行い」が美しかったのだと考えています。2004年6月末、サントリー・ホールで開かれたドイツ日本研究所(DIJ)の新旧所長交代式に参列した時、ベルリンにお戻りに

なる予定のイルメラ・日地谷=キルシェネライト所長が最後のスピーチで川端康成の『雪国(Schneeland)』の一節を引用されました。その時私は初めてドイツ語で川端文学に触れることができました。ドイツ語はゴツゴツして品が無いと意地悪な言い方をする私の悪友がいますが、その時は本当に美しく聞こえ、これは川端文学と朗読されている同所長のお心が美しいからだと納得した次第です。

皆様、言葉が美しいかどうかは言葉に秘められた内容、すなわち、「中身」次第だとお分り頂けたと思います。換言すれば高い「志」を持ち、その「志」を多くの方々に理解して頂いて「ヒトの和と輪」を築くため、また多くの方々の「志」を理解するために、奥深い内容が詰まった「美しい言葉」が必要となるのです。10年程前、国際関係の専門家、ジョージ・ワシントン大学(GWU)のヘンリー・ノウ教授が東京を訪れた時に、私の妻と共に3人で懐石料理を楽しみました。料亭に向かう直前、妻は「私は(専門的な話ができないので)大丈夫かしら?」と不安そうに言いました。それに対して、私は「大丈夫だよ。今晚、君はスマイル担当だよ。君の素敵な笑顔で心をこめて『ようこそ日本にいらっしゃいました』と言えば十分じゃないか」と答えました。こうしてその夜、3人で素晴らしい夜を過ごしたことは言うまでもありません。また、18世紀の英国詩人アレクサンダー・ポープは「言葉の表現は思想の衣装(Expression is the dress of thought.)」と言っております。すなわち、「美しい言葉」は、「心」と話の「内容」を一層豊かにし、「ヒトの和と輪」を広げることができます。ですから、母国語である日本語を筆頭として、「美しい言葉」を学んで頂きたいと思えます。換言すれば、言葉は内容と行動を精神的に洗練するための大切な「道具」です。一流のプロフェッショナルであるイチロー選手は私達に道具を大切にすることを教えてくれます。そして名手イチローが入念に手入れされた道具であるグラブで見せるフィン・プレーは、「ヒト」と素晴らしい道具が織

り成す好循環の結果でありましょう。才能ある若い皆様が、流暢で高い知的水準の言葉を操って、名手イチローのように世界の舞台上で活躍されることを心から願っております。

#### 4. 編集後記

「栗原後悔日誌@Harvard」第7号の本文は以上です。皆様へメッセージをお送り始めて半年が過ぎ、大晦日までの日程を考えますと、時の過ぎ行く速さを改めて感じております。また、私の後悔日誌が皆様にどれだけ参考になったかを考えますと、ただ赤面するばかりです。さて、日誌・日記と言えれば大哲学者、西田幾多郎博士の『日記』も簡潔ながら面白く読めます。京都帝国大学の教授時代、「デンケン先生」(独語 *denken* は英語 *think* の意)こと西田先生が喫煙の魅力と戦っていた様子もうかがい知ることができ、思わず微笑んでしまいます—英独両言語のチャンポンで、「Don't smoke mit eisernem Willen.(鉄の意志もて禁煙すべし)」と。京都帝大退官の1928(昭和3)年には、古代ギリシャの詩人ホメロスの『オデッセイア(*Οδύσσεια/The Odyssey*)』の中の言葉、「πολύτλας (色々苦勞を重ねながら堅忍不拔/*much-enduring/vielduldend*)」を記されています。私も皆様と共に、堅忍不拔の精神で、またスマイルとユーモアの精神を忘れず、世界に平和と繁栄が少しでも広がるようお願い、新年を迎えたいと思えます。そして来年も、皆様に応援するために、また非力で怠惰な自らを叱咤激励するためにも、「栗原後悔日誌@Harvard」を綴っていきたいと思えます。

以上

編集責任者	
栗原 潤	Jun KURIHARA
ハーバード大学	Senior Fellow,
ケネディ・スクール	John F. Kennedy School of Government,
シニア・フェロー	Harvard University
連絡先	
Mailing address:	79 JFK St., M-RCBG, Cambridge, MA 02138
Office address:	124 Mt. Auburn, Cambridge, MA 02138
Tel:	+1-617-384-7430; Fax: +1-617-495-4948
Email:	Jun_Kurihara@ksg.harvard.edu; JunKuri@aol.com